

浄土

1980-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受承認) 第三
昭和五十五年九月二十五日印刷 昭和五十五年
第四十六卷 第十号



教育のバランス

今日、日本の社会は核家族化の傾向をますます強めています。西欧的な個人主義の受容と、都市における住宅事情や、農村における長子相続の廃止による資産相続上の問題など



の諸条件が、このことに一層の拍車をかけているようです。夫婦と子供だけが単位の家庭は、人間の個性の尊重や、能力の自由な開発などの面で大きな利点が認められます。

しかしその反面、我々が、意識的にあるいは無意識的に伝え、そだててきた伝統的慣習に変化・混乱が生じてきたことも否定できません。しかもその変化は、道徳観、教育観の上で大きいようです。個性を尊重するということが、自由放任と受取られた一時期もありました。極端な規律主義の反動であったのかもしれません。しかし柱時計の振子のように、一度は大きくふれ動くことがあってもやがては落着いて行くものです。

特に教育というものについては、極端な道をたどることはさけなければなりません。例えば躰ということ一つをとり上げてみても、

ただ理由なく朝から晩まで叱りとばしていれば良いというのではありません。けじめをつけるということ念頭に置けば、子供達も素直に従う様になっていくものです。この様な場合、若い人々の中には、何を規準にどの様に子供達を導いて行ったら良いか、とまどいを感じることもあると思います。こういった時に古い人々の智慧が大いに役に立つものなのです。何気ない立居振舞の中に、無言の教訓が含まれている場合があります。

学校教育と家庭教育は車の両輪のようなものです。いづれか一方が欠けていても、バランスが取れなくなっても結果はかんばしく無い場合が多いのです。

教育者というものは決して、一部のスペシャリストだけを指しているものではありません。次の世代をになって行くものを正しく、たくましく育てて行くことが、我々に与えられた大きな任務であろうと思うのです。

(佐藤良純)

十月号



深心とは、謂わく深く信ずるの心なり。

——『選択本願念仏集』
(定本法然上人全集1 P.128—9)

目次

法話

お十夜におもう

一善導大師さまをしのびー……………大屋 瑞彦……(2)

十夜俳談……………細田 隆善……(6)

特別寄稿

浄土教と私……………岡本 薫 ……(11)

(連)(載)(法)(話) 第二回

目覚めたる生活……………小布施 弘学……(16)

◇思い出のページ (『浄土』第一巻第四号より抜粋)

人間学の立場から……………三木 清 ……(12)

お経を聞いて……………高村 光太郎 ……(16)

<念仏随想>

釈尊のお悟りと念仏……………大成 善雄……(32)

◇◇法然上人讃仰会創立四十五周年記念式典のお知らせ ……(28)

浄土句集……………一田 牛畝 選……(30)

<表紙のことば>古い壺……………土屋 正男……(27)

<表紙裏・巻頭言>教育のバランス ……佐藤 良純

念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々……………寺内 大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

話 法

お十夜におもう

—善導大師さまをしのび—

おおや ずいげん
大屋 瑞彦

(青森県板柳町大善寺住職)



“凶作、この目でみた” “先生、学校田もダメですが……” “まさか一粒のお米もとれないなんて……” “と小さな胸をいためる児童。

青森県三戸郡倉石村中市小学校のこども達のさけび声。地方紙「東奥日報」九月十日、三面トップ記事である。じっとみつめている四人のこども。稲穂をさわってみながら手にとって確かめるように見入る姿は、いじらしい。楽しみにしていた餅つき会も取りやめだそうだ。翌十一日の中央紙は「青森、三十九年ぶりの大凶作」大きい黒い活字。近年みたことのない暗い活字でもあった。

今年は「冷夏」冷たい夏、異常低温など確かに冷害を懸念するむきはあったが、何んとなくなるとかなるような、余り緊迫感もなく、むしろ、大変しのぎいい夏の日だったという印象さえあった。しかし、追い打ちをかけるように、九州地方を中心に、日本各地にもたらした長雨による水の被害。加えて、富士山落石事故をきっかけに、静岡駅前地下街ガス爆発によるあの惨事。新宿西口の京王バス車内にガソリンをまき、放火するという異常的あの悲惨な事故。ソ連原子力潜水艦の火災というショッキングな事故が、たてつづけに起った夏でもあった。

た。なんとしても夏は暑い暑いと汗をふきふき、蟬の聲がジージーと、そして長いさおの網で蟬をとる子ども達。水しぶきに歓声をあげはしゃぎまわるこどもたちの姿。野や山に涼を求める若者たちや家族づれ。そんな夏から二百十日の無事を願ひ、稲穂も黄金色に波うちはじめ、

秋来ぬと 目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

と藤原敏行が詠んだように、そぞろに秋の気色を感じながら、仏の广大慈恩に感謝し、五穀豊穰を祈り、お念仏相続の日暮しの中にお十夜を迎えるというのが、わが日本其自然というもののなのである。

ところでお十夜は、御承知の通り、「浄土三部経」というお経の中の『無量寿経』巻下に、「ここにおいて善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善をなすこと千歳するに勝れたり」とあることによる。

つまり「この娑婆世界においてわずか十日十夜善根を積むことは、他方諸仏の国での千年分の善行を積むほど

功德广大である」というのである。更に、前節には「正心正意をもって齋戒清浄を一日一夜たもつならば、無量寿国で行ずる百歳に勝る。その理由として、その国土は、無為自然であり、みな衆善を積み、髪の手ほどの悪も存在しないからだ」と述べ、その後節には、「その国土は、善をなすものが多く、悪をなすものは少く、福德自然にして造悪のない地である」というのである。

私は、お十夜の心は、阿弥陀様の广大慈恩に感謝し、共にお念仏の中に積善し、この世の中を、明るく、正しく、みんな仲よくの平和なお浄土、理想社会の国づくりをすることにあると思う。そのためには、この世で、善行を積むことの至難に気づきながらも、「広く徳本を植え、恩を布き、恵を施し、忍辱と精進を重ね、禅定と知恵をみがき、互いに教化し合い徳をなし善を立てる」のだと頂いている。

ところで、この世で善行をつむことが、何故至難なのだろう。確かに、昔も今も変わらないことかも知れないが、現代社会は、かなり深刻である。

物質に恵まれすぎたため、人間の欲望はむき出しで且つ追求止むことない。当然、充されないものは不満とし

てのこる。他人も同じだからいがみ合い、争いをはらむ。勝つためには手段も選ばない。他人の思いやりなど考えてはいられない。イライラやギスギスの人間関係から情緒も不安定。画一化社会への不満・反発は、じみに積み上げるといふひたむきな努力などばかりさくさく感ずる。いきおい一攫千金。かけごと、賭博、銀行強盗、営利誘拐、保険金目あての殺人、衝動的殺人行為や、世間をあっと思わせる事件をひきおこすのである。

そこに見落してはならないことがある。それは、人間だからもっている感情、感性、感動という情緒、情操が不感症になって、喜怒哀楽という感覚さえ正常に反応しなくなりつつあることである。

からすなぜなくの……

カラスノ勝手デシヨウ……

という「うた」がとび出した。何も、目くじら立てて言うほどのこともないという考え方はあるにしても、いつの間にか、気にならなくなつていくことが恐いのである。

家庭は、学校教育はどうしているのか……結局大人社会が悪い。行政の対応が問題だ。といえ、今こそ家庭のしつけ、対話が大事だと反論。結果は、自分にふりかかった事件は、自分で処理しなければならぬ。しかし、責任をとることは言うまでもないが、もはや、現代の複雑社会の中では、そう単純にはいかない問題がある。国際社会において「日本の勝手デシヨウ」とか、「アメリカの勝手デシヨウ」という時代は去った。やはり、この土で善を行うことのきびしさを認めざるを得ない。だから今こそ、私達ひとりびとりがさりげない、ささやかな善行を積みかさね、広く徳本を植えることによって、理想の国家社会の浄土を建設しなければならない。

ことしは、中国の善導大師さまの一千三百年ご遠忌を厳修しているが、『観経疏玄義分』『十四行偈』に、「先ず大衆をすすめて願をおこし三宝に帰せしむ」といふ『往生礼讃』には「発願文」をあげ、まず「願」をおこせよ、といわれている。私達は、この世の善行はむづかしいなど勝手な理屈をならべて安閑としてはいないだろうか。善導大師は、「日没無常偈」の中で、年命の日夜に去ることに気づかず、どうして安然としているのか。

若いものも、老いたるものも、気づけ、覚めよ今からでも、おそくはない、まだ、そんなに力があるではないか、さあ「願」をおこして、もろもろの衆生と共に、真実を求めてすすもうではないかと、勇猛不動の信念で、一人一人に呼びかけているのである。即ち「道俗時衆等、各々無上心をおこすべし」と。

私は、昨年、東京からの帰りの車中のトイレでこんな体験をした。最初入った時ペーパーのないことを知った。勿論スベアもない。その時は、只ないなアと思っただけだったが、二度目に入った時、片隅に小さな一コのテッシュがチョココンと置かれていた。私は、はっとした、さりげない行為、決して、大きく目立つはでな行為ではない。しかし誰かがおいてくれたことは確かだ。なんとほえましい、すがすがしい行為だろう、誰のためにといいのではない。どなたでもいい、お役にたてばという、小さくて大きな「善」。みんなが、その気になるならこの土の善も至難であるはずがない。

法然上人は、浄土門は、愚痴にかえりて極楽に生まると知るべしと仰せられた。「身を横たえて空の高さを知

る」(浄土宗カレンダー)のように、本当に愚かさに気づき、すなおな心で、自分をみつめる時に、善行が自然にできるようになるのではあるまいか。

「天下和順」の文を思い出す。日も月も清く明らかに、風、雨も適時で、天災も悪病もなく、国豊かで、人々の心も安らか、武器や武士の必要もない。そして仁、徳、礼、讓がある社会。無為自然、福德自然、そして「ほのほが空にのぼり、水はくだりさまになる、これみな法爾の道理なり」とおっしゃる法然上人。この夏のいろいろなできごとを思う時、この自然さが、いかにありがたいことであるかを深く感ずるのである。

津軽に「十夜おめぐのお花雪」ということばがある。昔、旧暦十月十五日のお十夜といえは必ず初雪があったという。これから厳しい津軽の冬だというのに、ちらちら降る雪を桜の花の散るとよむ心。春を待ち、彼岸を願いながら厳しい冬を無事生きぬきたいという願心なのであろう。そんな心で、ことしもお十夜を迎えたいものだ。

(注) おめぐとは、御命日の意味で日達上人の御命日が旧十月十三日でこの頃になると初雪があったことをいう。



十夜俳談

ほそ だ りゅう ぜん
細田 隆善

(東京三好勢至院住職、俳号豊明)

十夜とてかしこき法の教かな

樗良

十夜は、じゅうや又はじゅやと発音し、浄土宗寺院の大切な年中行事である。昔は旧暦の十月五日の夜から十五日の朝までの十昼夜にわたり、別時念仏会や引声念仏の十夜法要を厳修したものである。十日が五日になり、三日になり、現在は一日だけ修する寺院が多い。又新暦十月又は月遅れの十一月行うようになった。期日が定まっているところから、俳句の季題となった。お十夜、十夜

法会、十夜法要、十夜念仏、十夜寺、十夜鉦、十夜粥、十夜婆、蛸十夜などという俳句の季題が生れた。旧暦の十夜は初冬に入って寒い。

信心の涙も氷る十夜かな

虚子

くさめ聞く寒さうつりや十夜堂

爽雨

『無量寿経』に、「ここにおいて善を修すること十日十夜なるは他方諸仏の国土において善を修すること千歳なるに勝れり」の経文に十夜は基く。仏の国では善を行



一鎌倉・大本山光明寺三門一

うことはやさしいが、この世ではむつかしい。修善の徳をより多く積む必要があるとの意である。いつの世も盗人の跡はたえない。

織りさした布ぬすまれて十夜かな

来山

十夜はインド中国になく、わが国特有の行事である。もと、比叡山常行堂じょうぎやうだうの引声念仏しんせうねんぶつの法要を京都の真如堂しんじやうだうにおいて修したことに始まる。真如堂縁起によると、足利六代將軍義教ぎぎょう（嘉吉元年八一四四一〇没）の執権平貞経しつけんへいさだねは素行がよくなかった。その子の平貞国は念仏信者であったが、父と合わなかった。貞国は出家しようと真如堂に籠って三日三夜の別時念仏を修していると、夢枕に高僧が現れ出家はしばらく待てとのことであった。翌日將軍から使者があり、貞経は退職、吉野へ隠居、貞国に執権職を継がせるとのことであった。貞国はこれを仏恩と感謝し、あと七日七夜の別時念仏をつとめた。これが十日十夜の起りである。

夜念仏他念もあらぬ十夜かな

季吟

お十夜のはずみていざる木魚かな

三公

それから六十年後の明応四年（一四九五）三月、後土御門天皇が鎌倉光明寺の第八世観譽祐崇上人の高名なるを知り、宮中に招かれて二十一日間、阿弥陀經の講義を聴聞された。天皇は念仏門に深く帰依され、宮中において真如堂の十夜法要を修せられた。天皇が上人になにか記念の品をとらせたいとの言葉があったとき、上人は、出家の身なになに欲しいものはないとお断りした。しかし上人は光明寺において十夜法要を修することの勅許を願った。許可となって毎年光明寺において修するようになり、たちまち全国の浄土宗寺院の行事となってひろまった。

十方十夜みほとけの前去りがたき
人声の小寺にあまる十夜かな

暁台
召波

蛸十夜という季題があるが、十夜の起りの真如堂の十夜は、参詣者も多く、露店もたくさんでた。この露店で焼いた蛸を売り、この蛸を食べると疫病にかからないと

いう民間信仰がさかんになり、この季題が生れた。

蛸十夜御堂の奥の昼灯し

豊明

十夜法会は全国にひろまり、とくに関東の三大十夜は有名となった。第一は十夜発祥の鎌倉光明寺の引声念仏の十夜である。一名双盤十夜ともいう。引声念仏は、常行堂からの古い伝統のリズミカルな念仏の唱え方である。また大きな鉦を叩いて念仏を唱えるのを双盤念仏という。

十夜鉦明日の納豆もたたきけり
鉦講のあらかしましの十夜かな

言水
たかし

第二は鴻巣の勝願寺の塔婆十夜である。檀信徒がこぞって先祖と新亡あるいは各霊塔婆をあげ、塔婆回向を行うことで有名である。十夜法要を修する寺々では、現在も塔婆回向を行う。

若後家のことしも出来て十夜かな

大江丸

第三は八王寺の大善寺の諷誦文十夜である。檀信徒各家の供養を行う場合、哀調切々胸を打つ諷誦文を読んで回向することである。

亡き父に位牌児より十夜諷誦

牛畝

旧暦の十夜は満月に近く、天候も安定し月が冴えることが多いので、月に因む十夜の俳句は多い。

箔^{はく}おいた空や十夜の戻り脚^{あし}

北枝

冴えそむる鐘ぞ十夜の場の月

杉風

月影や外は十夜の人通り

子規

一夜一夜月おもしろの十夜かな

蝶夢

月に行く十夜の人や椋林^{むくばやし}

癖三酔

京都吉水知恩院は、浄土宗の総本山であり、黒谷金戒光明寺は大本山であるので、十夜法要は厳修される。

黒谷^{かた}の方の暗さに十夜かな

東洋城

白々と木の間の空や十夜寺

白雨

十夜をつとめる僧を俳句の季題で十夜僧という。十夜を終えれば一杯酌むこともあろう。

十夜あと僧の間にある小さかもり

泊雲

ちんちんと黄泉^{よみ}の底より十夜僧

静雲

五夜づつ法話受持つ十夜僧

衣都路

旧暦十夜のころは秋の収穫が一段落、新米がとれるので、本尊に供え、寺ではお粥にして参詣者に供養する。これを十夜粥といい、疫病除けになるという。宗派を問わず十夜寺に参詣する風習が多い。

運び来る僧みな若し十夜粥

石鼎

庫裏^{くら}におとす白髪^{しろがみ}一筋十夜粥

信子

阿波に多き狸^{はなし}の咄十夜粥

桜桃子

霧に来て小豆ほの浮く十夜粥

篤子

十夜は昔からお婆さんたちの楽しみの一つ、手伝った

り、だべったり、十夜粥を食べて唄ったり、踊ったりする。これが十夜婆ばばという俳句の季題となった。今は婆というと軽蔑の意味を持つが、昔は孫たちは、じじ、ばばとって親しんだものである。

十夜婆青き魚燈ぎようとうを手提げたり
合点がてんくひ首ばかりしていて十夜婆
愛嫁またよめをはなさず連れて十夜婆

まもる
静雲
菟糸子

十夜寺へ参詣に行く夜道も又風情がある。

夜歩よあるき行の子に門で逢ふ十夜かな
油燈あぶらびの人にしたしき十夜かな
野の道や十夜戻りの小提灯こじようちん
帰るさに宵の雨知る十夜かな
門前の家は寝ている十夜かな

太抵
蕪村
子規
竹冷
月居

昼の十夜詣りの句もある。

菜畑や横すぢかたの十夜道

一茶

田の中についと道つく十夜哉
昼高し霜に十夜の鐘が鳴る
舟つけて草原あがる十夜かな
おろかしや十夜帰りを犬吠ゆる

一茶
石鼎
蒼風
紅緑

十夜法会には蠟燭をあげ、御堂には絶え間なく蠟燭の火がともる。

蠟涙ろうなみに肩打たれたる十夜かな
灯ひの数の殖えて淋しき十夜かな
継ぎ継ぎて蠟新らしき十夜かな

たかし
たかし
石鼎

念仏を唱え風呂に入る、今日は十夜である。

居風呂すえ風呂へ念仏で沈む十夜かな

蓼太

十夜説教頷く人の聞き上手

豊明

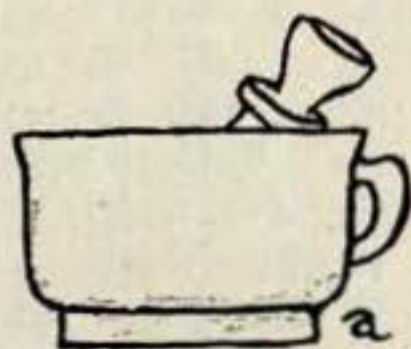
十夜寺山門由々し御宸筆

十夜寺定紋白く月に映ゆ

十夜寺異国の人も急ぎ足

〃
〃
〃

特 別 寄 稿



浄土教と私

岡本 薫
おかもと かおる

(学校法人光明学園理事長)

○念仏で救われる

私は大分県臼杵市の在に生れた農家の次男坊である。真宗東本願寺派の寺を菩提寺としていた。母は毎晩お勤めをし、私は母の膝を枕にしてお経や念仏を聞いた。今考えるとそれが縁となって、私の宗教への目覚めが比較的早く起きたのかもしれない。母は九十五歳で死んだ。

臼杵中学を四年修了で旧制松山高校の文科へ入学したが、一年生の終り頃から信仰への関心を持つようになった。俳句を作るために林間を逍遙している間に、自然の中に、何か自分のまだ知らないものがある、というような疑問がおこり、哲学や宗教に解決の道を求めざるを得なくなった。

学友に真宗寺院の子弟が居り、いろいろと話を聞き、また本も貸してもらって読んだが、私の悩みを救っては

くれなかった。そのうちに人生の無常と罪惡を感じてきた。自分の一挙手一投足がすべて罪惡に感じられ、ついにノイローゼになり、美しかった自然は灰色に見えてきた。いわば地獄の一部を感じたのである。

そういう苦しい心境のとき、松山の大林寺の住職大島玄瑞師の案内で学校に布教に見えた高僧があった。この方が後に光明会の第三祖になられた熊野宗純上人であった。光明会というのは浄土宗出身の山崎弁栄聖者が光明主義を弘めるために作られた教団である。光明主義とは、浄土宗の開祖法然上人の真精神を科学時代に実現せんとする主義で、念仏三昧を重んじ、現在から未来を通じて、自他ともに光明に生きんとする主義である。

私は四十人ぐらいの学友と共に、熊野上人の法話を拝聴した。法話は、天性、理性、靈性のお話で、靈性（仏性）を開くためには念仏三昧を行じなければならぬというものが結論であった。それで私の迷いはさめたのである。法然上人の「ただ一向に念仏すべし」であるが、真宗の教えは、信を養うための理くつが多く、念仏が端的に出てこないうらみがある。

追いつめられていたので、私はすぐ大林寺の修養会に

参加して、気持ちがよいように念仏を始めた。翌年は光明会第二祖笹本戒浄上人も見えたが、その修養会にも参加した。在学中私は校友会誌に、「遠い光」という随筆風の短篇小説を発表した。後から思えば「難思光」のところを行じていたのである。

東大の独文科へ入学してからは、横浜在住の笹本上人のお話を伺う機会が最も多かったが、実に尊い方で、菩薩さまとは、こういう方かと感服し、信州の唐沢山の七日間の別時にも参加した。坂道をのぼりながら、振返っては説法して下さったのを、今でも思い出す。

「遠い光」がだんだんと近い光になってゆき、ついに神人合一の体験をしたのは、神奈川県二宮町の知足寺（相馬千里師住職）の別時であった。導師は笹本上人で、休憩時間になって一同は庫裏にさがったが、私は念仏がおのずからコロコロととび出し、おまけに涙があふれで、恥しく一同と行動を共にすることができず、本堂の隣の間の片隅にうずくまって、発作（？）のおさまるのを待った。後から思うと、一種の「見仏」であり、感情的な見仏ともいうべきであろう。以来信の意味がガラリと変った。「分らないから信ずる」から「分ったから信ず

る」という風に変り、如来さまが申しますことを信ずるなどということが空々しくなった。「解信」から「証信」へ移行したのである。「たとえ独房へぶちこまれても、この念仏さえあれば大丈夫」という確信を得た。

以来念仏は面白くなり、趣味にまでなり、小石川の緑竹舎という郷里の実業家莊田氏の経営になる寄宿舎にいたが、毎晩夕食後、一時間は無礼講の時間であるから、自室で木魚をたたいて念仏した。日曜日には近くの一行院（八木信剛師住職）で数時間独りで念仏した。大学時代の後半は本郷赤門前の法真寺（伊川琢心師住職）に下宿して朝夕念仏した。卒業して就職した後も、正月前後の休みには、二宮の知足寺の裏山の念仏堂に独りこもって念仏したことが数回あった。

今はすでに七十五歳、体力気力ともに衰えたが、光明会本部の理事であり、関東支部長をも勤めている。また弁栄聖者創設の光明学園の理事長、高校と幼稚園の園長を勤めているが、全役員、全職員、全生徒が念仏を行じている。

足るを知り足らざるを知り念仏かな

○一つの疑問

―無間修の解釈―

「四修」というのがある。恭敬修、無間修、無余修、長時修であるが、その中の無間修が問題である。間断なく念仏するという意味であるが、称名念仏三昧中には無間でなければならぬし、それはまた可能でもある。しかし仕事をする時に、同時に称名念仏ができるであろうか。法然上人は「仕事をしながら念仏するのではなく、念仏しながら仕事をするのでなければいけない」と。また徳本行者も念仏しながら仕事もできるという意味のことを申されたと記憶するが、これは大へんむずかしく、もしそうしなければいけないというなら、念仏は易行ではなく難行である。

説法は僧侶の仕事であるが、ナムアミダブツを称えながら、同時に説法ができるであろうか。私は名僧、高僧の御説法をしばしば承ったが、一人として二者を同時に行っていたのを見たことがない。又私は生徒に話をするのが仕事であるが、一度も二者を同行したことはない。

出来ないのである。

掃除をしたり、草をとったりする単純な仕事なら二者を同行することも可能であろうがソロバンをおいたり、客に愛相をふりまいたり、電話で話をしたりする時にはできるものではない。

口に出さない憶念の念仏なら仕事をしながらでも出来るだろうという方もあるかもしれないが、それもやはり出来るものではないと思う。この疑問を解いて下さったのが弁栄聖者である。

「若し心が已に弥陀に同化した上は、たとい口に称名せずとも、其の一切の作為悉く念仏ならざるなし、事業即ち弥陀の聖意が業に現われたることなれば、還って立派な仏行であり候。念仏と云わば口に称うるばかりにあらず、如法（念仏）の心より為す業は、仏を身の業に現わすことなれば、それは口以上の念仏にて候。一体従来の念仏者は只口ばかりを重く見て身に仏行を為すを敢てせざるは発展の度低きなり」（田中木又先生著『弁栄上人及びその光明主義』三四二ページ）

だいたい仕事というものは、世のため人のためになるものであるから、利他行の一つである。称名念仏は自利

の行である。しかし自利利他と云って本来一体のものである。しかし表裏がある。称名念仏のときは自利が表で利他が裏である。社会のために働く光明活動のときはその逆で、利他が表であり自利が裏である。表（陽性）が裏（陰性）の領分まで侵したのが、念仏をしながら仕事をしなければならぬということになる。

しかしおそらくは、仕事がいそがしくて念仏するヒマがないという人に対する対機説法であつたのであらうと思う。単純な仕事なら不可能ではないからである。

弁栄聖者は、仏に仕えるつもりで、仏心（智慧と慈悲）を身口意の三業に現わせ、それが光明生活であり、念仏であると教えていることになる。光明会の礼拝儀には、光明生活のことを「光榮を現わす」と記してある。そして一生懸命でやれと教えている。即ち「我身と心との総てを捧げて仕え奉らん。翼わくは一に光榮を現わすべき務を果す聖龍を垂れ給え」とある。

法然上人の「ただ一向に念仏すべし」に当るのが、礼拝儀の「今や己の身を献げて至心に如来の靈応を勧請し奉る」である。

利他行では、親鸞聖人の「如来大悲の御徳は身を粉に

しても報ずべし」に当るのが、礼拝儀の「我身と心との総てを捧げて仕え奉らん」に当る。真宗が発展したのはこの聖訓によるものと思う。

なお自利と利他とは同格であるという認識が大切である。故に称名念仏と同じように、光明生活に努力することとは、即ち菩薩行に努力することは、人格の向上に役立つのである。善因善果、善因楽果の説法は今一層強調すべきであろう。

幸いに教育基本法第一条には「教育は人格の完成をめざし……」とある。人格の完成とは仏教の菩提ぼだい（正覚）のことである。涅槃と菩提を合わせて成仏という。浄土宗の「お手つき運動」は菩薩行であり、私は大いに期待している。

私は真宗の家に生れながら浄土宗の寺院や御僧侶のお世話になって今日に及んでいる。しかし光明会のお世話にならなければ、入信も出来ないし、法然上人の偉大な御人格をも伺い知することは出来なかったのではあるまいか。

私は仏恩報謝のために、数年前から、篤信者から原稿

を頂いて『念仏功德靈驗集』という小冊子を編集発行している。九月頃第四集が出るが、原稿紙五枚から十枚位の長さ、どなたでも御寄稿を頂けば幸いである。

『新刊』

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。

B 6判 二四〇頁 価一五〇〇円

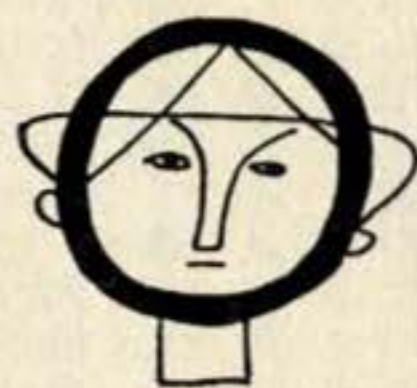
(二一六〇円)

(申し込み先)

〒381-12 長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二



連載法話

第二回

目覚めたる生活

おぶせ こうがく
小布施 弘学

(長野市長明寺住職)

仏とは、漢訳して覺者であるから、仏教は覺醒の教え

である。即ち、転迷開悟(迷いを転じて悟りを開く)して、

私達を成仏に導くものである。人間に生れてきた以上、

人が人たらしとすることよりも、人が仏たらしと願うこ

とが、人と生れた甲斐であり、心ある人間の生き方であ

る。人が人たらしとする道徳の範疇はんちゆうから、人が仏たらし

とする宗教の世界につき進んでいくことによって、人が

人たらしとする願いもまた叶えられるのである。

道徳は、善惡是非曲直を示しても、人間がいかにした

ら、善に、是に、直になるかを教えてはくれない。迷い

易き人間をして、めざめしめるものは道徳ではなく、宗

教である。

人間の知識の中に「覺醒の必要性」があっても、覺者の教えによる実践がなくして、転迷も、開悟もできるものではない。

宗教の生命は、理を實踐によって表現していくものである。

善導大師は、「煩惱無涯底」といわれたが、人間の迷い煩惱を除去(解脱)して、悟りの境涯に到達することは容易な業ではない。

「煩惱の蠅 追えども去らず、

菩提の鹿 招けども来たらず

の嘆きを深くするだけである。

ここにおいて、煩惱を自力の修行によって解脱して、
こうという聖道門は、高嶺の花とあきらめて、生涯、煩
悩を除去することのできない自己であると気づくのであ
る。そして、既におのれのために、救いの道の開かれて
いたことを知るのである。

従って、入信の順序は、信機（おのれを罪惡生死の凡夫
であったと自覺すること）によって、信法（この私をそのま
ま救ってくれるみ法のあったことに気付く）がなされるので
ある。

だから、念仏を称えれば、この身この仮、救われてい
くという弥陀の本願が、信じられない人は、おのれ自身
の見究めが緩慘であるからである。

救われていくためには、先ず、自己のなにものである
かを、覺醒しなければならぬ。いかなる宗教も、信仰
も、自分を冷ややかに自覺することくなくして入信は不可
能である。然らば、自覺の内容は何か。

一つには、無常の自覺、二つには罪惡の自覺である。

無常も罪惡も、決して朗らかな、明るい言葉ではな
い。然しこの究明がなされなければ、人間の願いである
常恒も清淨も知ることにはできない。

越後の良寛は、

ゆく水のせき止むることのあるらめど

かへらぬものは月日なりけり

と詠って、光陰は矢の如く流れ過ぎていくがために、
寸時とて怠ることなく、とりかえしのつかないこの尊い
人生を、悔いなく生きるように訓しているのである。

私は、檀家の告別式を済ませたあと、家族や会葬者に、
一言の法話をするのである。「只今、あなた方は、故人
との告別を済ませたが、私達にとって、絶対に告別する
ことのできないものがある。それは、人間と無常との別
れを告げることが絶対にできないということである」
と。

今日の葬儀は他人のことではなく、やがて我が家に
も、斯様な悲しい日が、刻々迫って来るのである。今は
他人に永久の別れを告げているが、何時の日か、私も死
出の旅路に見送られていく身であると認識しなければな
らない。

告別式に参ずる者は、このように私自身の心に云いきかせて焼香することが、真実の告別なのである。

毎日顔を合わせて生きるお互いは、永い月日のように考えられるけれども、老少不定の世であってみれば、一寸先は闇である。

ちっと、相手の顔をみつめて、*「あと幾何かこの人と、相会し相語らうことができるであらうか」*と考えた時、「一期一会」である。

明日ありと思う心の仇桜

夜半に嵐の吹かぬものかわ

別れてから、悔いをのこさぬように、一日一日をゆるがせにしてはならない。

過去の時間は、いかなる力をもってしても購うことができない。

次に罪惡について考えてみよう。

仏教の三時（正法・像法・末法）の思想によれば、現代はまさしく、末法である。この末法は、五濁、四流に渦巻く時代である。

五濁とは、末期的症状の時代（劫濁）であって、思想風俗の乱れが夥しく（見濁）、人間の恥すべき煩惱をあから

さまにして（煩惱濁）、罪の意識の薄く、程度の低い人間になりさがって（衆生濁）、人間の生命が危機にさらされている（命濁）ことなのである。

そして、この世を渦巻く四流とは、邪なこと（見流）果てしなき貪婪さ（欲流）迷いにあけくれ（有流）人間の愚かさに気づかない（無明流）のことである。

科学の進歩も、経済の発展も、人間の生きていくために欠くことのできないものであるけれども、これはみな、人間の向上に益することが原点でなければならぬ。機械に酷使されて人間不信におちいり、物の豊かさによって人の心を墮落させる結果になってはならない。

しかるに、それ等の進歩発展が、人間性の向上に調和を欠いているがために、末世的現状は日毎に烈しくなるのである。

我々、日本人に罪の意識がうすいことは、無信仰の証拠である。葬儀を盛大に行い、法事墓参りが盛んになることだけが信仰昂揚の姿ではない。おのれの信仰が、自己を覚醒させ、社会の浄化と、自他共栄の世界の実現に役立っていかねばならない。

我々に神（仏）と人間（凡夫）との結合が強くなされてい

れば、おのれの罪を、神仏に対して自覚することができ
るが、日本人の考えは、人と人との間において、おのれ
の罪を「恥」として意識するが故に、罪悪感がうすくな
ってしまうのである。

恥を知る、恥をかくという認識は、道德の範囲であつ
て、宗教ではない。人目を恐れ、世間態を考える恥を、
神や仏の前に罪と自覚することが、宗教である。

しかも現代は、人に向けられる恥の心さえ、うすくな
って、恥を知らない鉄面皮の人間が堂々とまかり通る世
の中である。これを日夜見せつけられても、少しの義憤
も覚えず、公憤も考えない。誠に無神経にして鈍感な人
間になりさがっているのが現状である。

法律規則や、人の目、世間態を考えて生きる低い次元
から、神仏の照鑑を常に自覚して生きる、高くして美し
い次元に、人間を引き上げなければならぬ。ここに宗
教の必要性が表われてくるのである。

念仏を称えていると、おのずから厭穢の心（きたないも
のを厭う潔癖性）が養われ、欣浄の心（人一倍清浄無垢を求
める気持）が培かわれてくるのである。

泥沼のような世界に生きねばならない現代の人間が、

心まで泥に穢してはならない。あの泥中に咲く白蓮華の
ように生きてこそ、心ある人間の姿である。「覆水、盆
にかえらず」とあきらめて社会人心の汚染を拱手傍観し
ていることは罪悪である。人間だれしも善を好み、悪を
にくむ心をもっている。善なるものにふれた時、自己に
反省慚愧の念が生じ、しばしでも「清涼」を感じるこ
とができる。この清涼心が信仰なのである。

煩惱によごれた心の器に、清浄なる念仏の水を注ぎこ
むことによって、自覚、覚醒の念が心の中で大きな波紋
となって、それが言行にひびいて覚者への道を歩ませる
のである。

たとえ、悟りの道は遠くとも、み仏の護念のもと、大
悲のみ手に引かれつつ、常におのれの愚かさに疼きなが
らきびしく生きていくのが他力浄土の法門である。

勿体なやわがおきふしの片時も

そらし給はぬ慈悲のまなざし

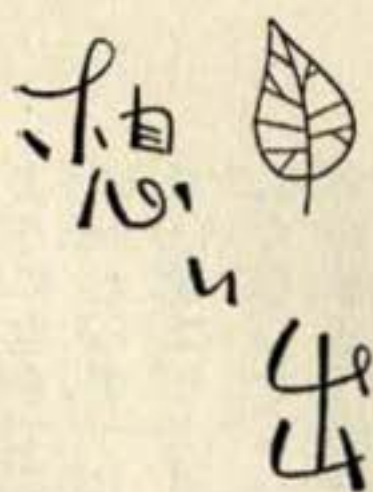
（聖眷）

◇◇◇ 想い出のページ ◇◇◇

『浄土』昭和十年八月号(第一巻第四号)より抜萃

来る十一月八日(土)に、東京・田町笹川記念会館で行われる法然上人讃仰会創立四十五周年の記念式典に併わせて、今号は、昭和十一年八月一日に発刊された『浄土』誌第一巻第四号から想い出のページを開いてみた。当時の懐しい目次を眺めながら、大哲学者三木清の法然上人景仰の一文と、大彫刻家高村光太郎がその父高村光雲を偲んだ心暖まる随想を、併わせて再録したのである。

人間学の立場から



三^み木^き

清^{きよし}

私が生れた地方は真宗の盛んな所で、私の家も真宗である。亡母（なきはは）は熱心な信者で殆（ほとんど）毎晩仏壇の前で読経してゐたので、私も子供の頃、いつのまにかそれらの経文を暗誦（あんしょう）できるやうになった。そんな次第で学生時代にも親鸞上人の書かれたものは特に愛読し、また近角（ちかすみ）師の『歎異鈔講義』など屢々（しばしば）聴聞したことがある。後年私がパスカルにおける人間の研究といふ書物を出したとき、親鸞の教（おしえ）に似たところが多いといふ批評を、二三真宗の学者から聞かされたが、多分それは私が上人のものを読んで得たものがそのうちにおのずから現はれたのであらう。そのやうな批評に刺戟されて、当時私は親鸞の人間学といったものを詳しく調べて書いてみたいと考へたこともある。今日も私が哲学のうち人間学に特別に深い関心を有するといふことは、子供の頃からの浄土教的思想の影響によるのであらう。

そのやうな関係で法然上人に対しても、浄土の法門を我が国において初めて真に宣明された方として、かねて

景仰（けいこう）してゐる。『歎異鈔』の中に、「たとひ法然上人に賺（すか）されまゐらせて念仏して地獄に墮（お）ちたりとも、更に後悔すべからず候」とあるのは、他力の信念を語るものであらうが、さう云はれてゐる法然上人は、よほど偉い人であつたに相違ない。

私が他力の信仰に心をひかれるのは、何よりもそれが人間の現実を深く理解した上で立てられたものであるためである。広く仏教といふうちには、勿論（もちろん）種々の高遠な形而上学的思想が含まれており、哲学の研究者としてそれにも興味を持たないわけではないが、しかし私が特に心をひかれるのは、それが深い人間理解を有するといふことである。そしてこの点において浄土教の思想はとりわけすぐれてゐるのではないかと私には思はれるのである。仏教に達するため人間論から出発したのがその特色ではないかと思はれる。法然上人が、「ここに我等如きはすでに戒定恵の三学の器（うつわ）にあらず」と云ひ、「十悪の法然房、愚痴の法然房が念仏して往生せんと云ふなり」と申されたのは、人間性のどん底

を見究めての言葉である。凡入報土（ぼんにゅうほうど）の思想の根底には人間の現実の深い洞察（どうさつ）がなければならぬ。

今日人間について科学的研究は非常に進歩した。またその学問も人類学、生理学、心理学、社会学等いろいろ分化してゐる。これら多種多様の知識はもとより我々にとって決して無益ではないであらう。しかし我々が自身自身の生活を省（かえり）みるとき、如何にそれらの知識が一面的で、抽象的であるかを考へずにはゐられない。現代哲学において現実の人間の具体的な研究を目差す人文学といふものが起つたのもそのためである。このとき仏書を開くならば、如何にそれが深く我々の現実を見究めているかに驚（おどろ）かれ、畏（おそ）れられるのである。「苦悩の時にあつては、外面的なる事物に関する学問は、人間についての学問の無知から私を慰めぬであらう」とパスカルは云つた。宗教は単に何を為すべきかを教へるものではない。それは人間が現に如何にあるかを理解せしめる。現に如何にあるかといふことから何を為

法然上人鑽仰会とは

日本文化の母胎は法然上人の思想と人格である。法然上人を知らずして、日本精神を語ることはできない。日本を語らんとするものは吾等と協同せよ……

■法然上人鑽仰会規約抜粹

◆ 会 員

- どなたでも会員になれます。
- 入会申込書と会費年額一円とをお送り下されば会員になれます。
- 会員には雑誌「浄土」と会報「法然鑽仰」とが配布されます。
- 会員はその他いろいろな本会の特典が受けられます。

すべきかが従って来るといふのではない。何を為すべきかを離れては、現に如何にあるかも本当には理解できないというのが人間の存在である。信仰を除いては人間についての知識は完全であることができないのである。

宗教の真理性を証明するために学者は種々の議論をしている。しかし私には宗教の真理性は、それが人間の現実さ何物にもまさってよく理解させるといふことによつて示されてゐると思はれる。そのやうに具体的に、真実に人間を理解させるものが他にあるか。もし宗教が人間の存在を最もよく理解させるものとすれば、宗教は真理でなければならぬ。

日本仏教史上、仏教徒の眼を人間の問題に向けさせ、人間論と宗教とを内面的に結合した偉大な思想家として、私は法然上人を景仰してゐる。

◆どんな事業をするか

—刊行物—

△面白くて知らず知らずに信仰が得られる大衆雑

誌「浄土」月刊

△機関誌「法然讃仰」月刊

—催物—

「法然上人劇」大劇場にて華々しく上演、各地に

於ける「大講演会」・「法然上人讃仰大展覧会」、

着実真剣な「信仰座談会」・「研究会」

○当時の法然上人讃仰会の気迫と意気込みを感じさせる内容です。一部十センと記された『浄土』誌をめくりながら感慨無量です。



お経を聞いて

高村 光太郎
たかむら こうたろう

私は世にいふ信心家ではない。亡父は並々ならぬ観音の信者で、しばしば、亡父自身が火中から救ひまいらせたといふ元本所五百羅漢寺にあった松雲元慶禪師作るところの聖観音木像の前に立って合掌黙念してゐる姿を見かけた。私は仏像の前に立って合掌黙禱する念を持たない。亡父は観音像を製作する事に無上の歡喜を持っていたが、私は仏像を曾（かつ）て作らず、又今日でも作らぬ。自分が心から礼拝する事の出来ぬ仏を敢（あえ）て刻むのは仏に対する冒瀆（どうとく）としか思へぬからである。仏像の形相をただ芸術上の技術で作るだけならば勿論私にも出来る。芸術的価値はおのづから其処（そこ）に生れも為（し）やうが、仏は恐らくそんな価値を喜びたまはぬであらう。私が心身を傾倒するのは自然そのものになり、触目の自然が包むその奥所こそ私の祭壇なのである。私は飽くまでも人間を作り、自然を描く。

さういふ私が昨年（昭和九年）父を失ひ、引いて寺院との縁を多く持った。お寺に坐ってお経をしばしば聴いた。私の家は浄土宗なのでそのお経を一番多くきいた。其外亡父は天台、真言、曹洞、法相等の諸宗の大徳から追善の供養をうけた。従って私もそれぞれのお経をきいた。亡父に対する私の哀惜の念と、死別に対する私の自然諦観とは、私自身にと

つては寺院とは何の関係も無い事であったが信心深かった亡父が斯ういふお経をあげてさぞ満足であらうといふやうな気はした。私は元来人は死んで自然の元素に加(か)へるといふ一事のみで実に清浄な、肩の軽くなるやうな歓喜を感じる者であるが、さすがに父が死んだ時はまだそこらに見へない父が居るやうな気がして、お寺のお経を父もきいてゐると思ひたかった。それでも正直にいふとお寺に坐つてゐる私にとっては、お経全体が音楽となつて耳に入り、法要の儀式が造形的の点となつて眼に映るのであった。坊さんの列の後ろの親族席といふのに坐つて袈裟の襞皺(しわ)の美しさ、読経する坊さんの合唱の美しさに打たれないわけにゆかなかつた。法要の時のお経は死者に対してよりも生き残つた者等に対して多くの意味がある様に思はれる。お経全体としての音楽は不思議な魅力を以て人の傷心を和らげ、死生の執着心から人を脱却せしめ、更に人の生命力と宇宙に充滿する自然力との微妙な融合を悟入せしめ、自他の対立から人を開放して魂の拡大を自覺せしめる絶対境に人を導き入れる。それ故向ふにいる仏にむやみにお辞儀する禪宗のお経よりも、ひたすら仏の懷(ふところ)に抱かれてしまふやうな浄土宗のお経の方が私に快(よ)かつた。お辞儀するうちは自分の存在がまだあるが抱かれてしまふと何にも無くなる。「……の時に臨んで心顛倒(てんどう)せず心錯乱(しゃくらん)せず」云々の例の文句をきき、おしまひに念仏専念の南無阿弥陀仏の無限の繰返しをきいてみると、いつのまにか自分でも南無阿弥陀仏を口の中で繰返しながら、ひろびろとした世界へ出てしまふ。さうして妙に、勇氣が出て来る。生命のある限り専念に生き切つて爽やかに死なうという気が自然に湧き起る。私のような無信心者でも此のお経の功德には感謝せずに居られなかつた。

|| コラムから ||

芭蕉の辞世

虫の音の弱りそめた庭を、さっきから幾度か時雨
が通った。枕頭(まくらべ)の行灯(あんどん)に灯影
がゆれて壁にうつる人達の影が淋しい。

これは浪速(なにわ)の花屋の裏座敷である。渡り
鳥のやうに長い旅を重ねて来た芭蕉は、明日をも知
れぬ其の身を病床に横たへてゐる。

京(みやこ)からわざわざ走せつけた去来は思ひ定
めたかのやうに、

「昔から名ある宗師(そうし)で、大期(だいご)
に辞世のない者は殆んど無いやうに思ひます。あ
なたの御病気は無論本服いたしますこととは思ひ
ますけれども、また大期に臨んでおいでなさるこ
とも否めません。どうか御辞世の一句をお残し下
さいませ」

と、くもり勝ちな声を押しかくして言ひ終ると、
師の頭をじっと見つめた。衰へ果てた翁は静かに、
「昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日

の辞世、わたしが生涯いひ捨てた句は一句として
辞世でないものはない。もし芭蕉の辞世はと問ふ
人があったなら、この年頃言ひ捨てた句のいづれ
なりとも辞世だと云って示して下され。説法従
来、常示寂滅相。これは釈尊の辞世で、亦一代の
仏教この二句よりなかったのである」

と、言った。それは皺枯れた声ではあったが、言
葉には一種の力が籠ってゐた。

折から時雨はまた板庇(いたひさし)をたたいた。
その音を聞きつけた芭蕉は、

「初しぐれぢやなあ……。わたしはこのしぐれ
を聞きながら死ぬかなあ……」
と静かに言った。

旅に病んで夢の枯野をかけめぐる

傍にゐた惟然は急いでその言葉をかきとめた。や
がて芭蕉は再び口を開いた。

「これは辞世ではない。いや辞世でないことも
ない。病中の心ではあるけれども、しかし、生死
の大事を前におきながら……生涯好みの風流とは
言へ……これも亦妄執の一つというものか……」

表紙のことば

「古い壺」

土屋 正男

先年、画友に誘われて草津の宿にお世話になった。そこのご主人が大変愉快な人で、数々の古道具を蒐集する癖があつて、一夕を楽しい話に過したが、帰りに頂戴したのがこの壺である。健康でなんの気取りもない、実用的な唯の壺であるが、傾けるととくとくと音がする。なんともこころよい。この形に出ない音が用をたすけているのである。

この壺はごく一般にどこの家の台所にもごろごろしていたもので、醬油入れにもどぶろく買いにも使われていた代物だそうだ。

考えてみると近頃の酒壺は各銘柄が競うようにデラックスなスタイルで中味を誇張しているかにみえる。飲んでしまえばあとは空しいあき壺にすぎないものを。

だが人間世界に振返ってみれば、昔、職分に応じてそれぞれの服装みなりをしていたのが、人間平等ということと同じように背広服になった。それが個性がないということ、フィーリングとやらで男達までビラシヤラ飾りを身につけるになつて、ことさら異装をして自己顕示する世の中だ。酒蔵が壺の外形に憂身をやつすのも世の中だろう。

南米エクアドル古代の壺で鳥型をした双頭壺が、やはり傾けると絶妙の音を発するのを実際に手にとって試したことがある。前人達はこのような楽しみ方を多分に知っていたのだらう。職人達は自分の仕事着を誇りにしていたものだ。

酒が過ぎて話がくどくなった。おしまい。

◇ 法然上人鑽仰会創立四十五周年記念式典のお知らせ ◇

昭和十年五月一日に、『浄土』五月創刊号の第一巻第一号を発刊してから、法然上人鑽仰会の足跡はすでに四十五年を越える歳月をけみしてきた。『浄土』誌も今年は四十六巻目に入り、小冊子ながらたゆまぬ前進を続けているのである。

そこで、今秋十一月八日(土)、東京・田町の笹川記念会館において、法然上人鑽仰会創立四十五周年

記念式典を催すことになったのである。式典は座談会や左に掲げたプログラムの如く、森爽氏主宰の「月影会舞踊団」の特別バレエ公演「二河白道」の上演をメインにして、半世紀近い法然上人鑽仰運動の歩みを振り返り、新しい展望を開きたいのである。なおこれに併わせて、善導大師一三〇〇年ご遠忌と法然上人誕生八五〇年のお待受けの慶讃を営むつもりである。

—— 法然上人鑽仰会創立四十五周年記念 ——

「法然上人——行動と救い——」

日時 昭和五十五年十一月八日(土) 午時二時

場所 東京・田町 笹川記念会館

会費 一、第一部(式典・公開座談会・創作舞踊)・第二部(記念パーティー) 会費 一万円也
一、第一部整理券 一千円也

◇ プ ロ グ ラ ム ◇

I 式 典

P.M. 2:00

開会の辞

法 楽

御導師 大本山増上寺法主 藤井実応 台下

挨拶

法然上人讃仰会代表 佐藤 密雄

祝 辞

浄土宗宗務総長 武田 喬彦
総本山知恩院執事長 鶴飼 隆玄

綱領宣言

II 記念公開座談会

P.M. 2:30

「法然上人——行動と救い——」

出席 作家 寺内大吉

作家 永井路子

大正大学教授 竹中信常

司会 大正大学教授 安居香山

III 創作舞踊

P.M. 4:00

「二河白道」

出演 森爽主宰・月影会舞踊団

作 寺内大吉

作曲 江口浩司

構成演出 森 爽

閉会の辞

IV 記念パーティー

P.M. 5:30

散会 P.M. 7:00

浄土句集

一田牛畝選

評 踊んで送り火を焚く幼な子の手の数珠の房は地に触れているのである。そんなことにはかかわりもなく、魂送っている子等は可愛く微笑しいものである。

福岡 服部 光代

鬼瓦憤怒の口に雀の子

京都 安藤 寛

評 高々と鬼瓦が聳えている。そしてその

口は憤怒の相である。雀の子はそんなことにはかかわりもなく楽しそうだ。

東京 細田 初枝

戦災の跡かたも無し終戦日

評 焼け野原となった戦災地も早や三十五

年にもなれば、家ばかりで其の跡さえも全然不明となって仕舞っている。

福岡 高良 慈風

孝心の飛行機で駆けつけ墓参り

評 東京に住っている人は故郷にはなかなか

か帰れぬが、飛行機で寸時の暇を作って墓詣りされ、先立ちし仏達もさぞ喜んでくれたことならん。これぞ誠の孝心。

山口 三井 寛静

酔いしれて過去の人呼ぶ盆の客

評 盆にお詣りして焼酎よばれ、足とられ

たばかりでもなく、酔ふて仕舞い、死んだ過去の人の名を呼んで、その人の在りし日のことを思い浮べているのは本当に盆の客らしいが、そんな人も稀だ。

福岡 安藤平二郎

踊む子の数珠を地に触れ魂送り

こんな店にも夏帽子売っており

東京 真野よし子

高々と朱欒の花の武家屋敷

東京 阪入志津枝

独居の女主や夾竹桃

東京 鈴木 葉子

鐘の音の流れて梅雨の法事かな

東京 小笠原香祥

あかあかと灯笼揺れて盆供養

東京 栗原やえ子

今年又夫の好みし梅酒かな

埼玉 佐久間愛子
父母の歳越えて炎暑の今日を生く

東京 田中 秀代
手折りたる額紫陽花を供華として

愛知 渡辺 杜水
昼の風呂甘えて喜寿の梅雨籠

福岡 原 敬二郎
地蔵盆博多の秘史をいまさらに

東京 真野 竜
馬洗ふ引湯の煙る五月雨

三重 山田 うた
風鈴に風の程よく孫眠る

山形 松田 光誉
寛政の鐘つき仏迎えけり

東京 吉原登起子
腰かがめ草取る髪に風渡る

福岡 権藤みきを
垂るる萩叩く長雨容赦なく

福岡 上滝津弥音
魂迎え遺影の母の笑み給ふ

東京 阪入 等達
善導忌すませ安堵の梅雨籠

三重 森 静枝
山つつじどっさり抱きて里寺へ

福岡 稲永 新
愚痴らぬと決めし必に蟬をきく

東京 新井 新生
山梔子の大きな花の匂ひ来る

神奈川 松本せつよ
新盆に又一入の淋しさよ

福岡 高良 幸代
見なれたる青田日増しに色濃ゆく

福岡 永江 隆説
草笛を吹き釣舟に合図せる

群馬 島津 か寿
君の詩胸にたたみて魂まつり

福岡 荒牧 還愚
櫛田社へ怒濤の如く追山笠が

東京 末常てる子
芭蕉恋ひ伊良湖灯台梅雨曇

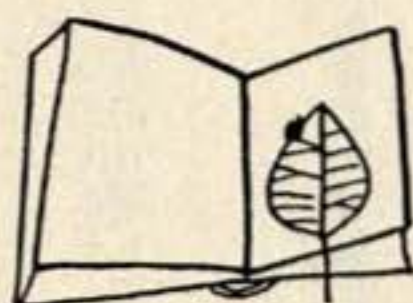
山形 松田 充子
吾子の肩浴衣を着れば広さかな

福岡 三牧 重利
浴衣着て音頭とる娘の美しく

東京 栗原とも子
この家に宿り夜明の遠蛙

十夜僧より死刑囚に生戒名 一田 牛畝

(念) (仏) (随) (想)



釈尊のお悟りと念仏

おおなりぜんゆう
大成善雄

(山口教区教化団長
岩国市称光寺住職)

お釈迦さまが六年間の苦行をやめて、独り菩提樹の下に坐って考えておられた時、十二月八日の暁の明星が東の空にまたたいている頃遂にお覚りが開けたのであるが、その時釈尊は思わず手を合わせて「南無仏」と拝まれたということである。それ迄の苦悩が宇宙の大生命への帰依と感謝の心に変られたのである。私どもの浄土宗の南無阿弥陀仏は、この釈尊の南無仏の精神を正しく受けついだ仏教の正統中の正統の教えである。

釈尊の成道から今日まで二千五百年余りの

間に仏教は次第に発展して、浄土宗の教えにも多くの修飾が加わっているけれど、お念仏の真精神には釈尊のお覚りの精神がこもっていることだけは見失ってはならないことであろう。

お悟りの内容

釈尊が三十六歳でお覚りになられたその精神内容はとても我々凡夫には分る訳がない。というのが一般の考え方であるが、私は釈尊がお覚りを得られてからなくなられるまでそ

のご生涯をかけて熱心に法を説かれた点からみて、その内容が他の人には全く分らないようなものではなくて、誰でもそう考えることができるような普遍的な真理であつたように思われる。

釈尊の最初のご説法に、苦集滅道のいわゆる四諦の教えがある。これは仏教の根本原則といつてもよいもので、その第一の苦とは、人間は苦を感じるものだということ、第二の集とは苦が起るのにはその原因があるということ、第三で、集とは家を作るためにはいろいろな材料を集めるように、その原因のことであるが、この原因は我見といつて、この私は世界に於て独立の独自の存在であると思うことである。この我見にもとづいて自分だけを大事に思う我執が起り、これが「世の中が自分の思うようにならない」という苦を感じる原因であるというが釈尊の教えであり、またこれが釈尊のお覚りの中心であるように思われる。

四諦の第三番目は滅であつて、苦の滅、すなわちお覚り、ねはんがある、ということであり、次の第四番目の道とは、苦を滅する方法といふことで、正しく見る正見、正思等の八正道が示されている。

苦の原因

苦の原因は我見であるが、我見とはこの私世界から独立した別の生命をもつたものであると、自我を主張する心である。こうして自分だけは特別の存在であるという我見にもとづいて生活していると、老、病、死、求めて得られない等の苦、要するに氣にいらぬという苦を感じるわけで、それは世界が悪いというよりも、この私の人生観の方に原因があるのでないかというのが釈尊の考え方である。

縁起

釈尊は何を覚られたのか。一言でいえば縁

起を覚られたのである、というのが近代仏教学の成果である。縁起は「よって起る」という意味であって、それは実は我見がどうして出来るかを説明されたものである。

それをともすると、縁起とはすべてのものは因と縁によって出来るのであると説かれたとして、すべてのものの発生の原理を説明されたものと受けとっている人があるけれども、釈尊はご自分が万物の発生について説明することができるとは思っておられない。そのことは弟子がその様なことについての説明を求めたのに対して、毒矢のたとえを以て、その様な議論をいましめられ、「私は唯だ苦を離れる道を説く」とその立場をはっきり示しておられる。

縁起の説明は経や論の中には複雑な説明もあるけど、私は釈尊の「これあるに縁りて彼あり、これ無ければ彼なし」という説明の言葉を重ねて見たい。それは私どもの意識の、区別する働きを説明しようとしておられるの

であって、これをすべてのものの発生の説明として受けとることは困難である。

世親は、迷いの三界は唯だ意識の虚妄なる（実体のともなわない）分別に縁って起るのであるという、三界唯識を説かれたが、これは釈尊の精神を正しく受け取った教である。

唯識は我が国では奈良時代の昔から法相宗の教えとして学ばれ、私どもが分けて見るより以前の真実の存在を「真如」と名づけ、この真如のままに來現することのできる人が真如來現の人すなわち如來さまなのである。分別すなわち分けへだてをしない、思いやりのある人が仏さまの様な人であり、この点日本人の精神の方が西洋の精神よりはるかに程度が高いのであるが、現代の日本人はその真価を觀る目を失っているようである。

ダルマへの帰依

釈尊は「ダルマに帰依せよ」と教えられた。ダルマは法と訳すけれど、その意味は、

すべての存在を支えるもの、という意味であって、従ってどんなものでもこの法の外に出ることは出来ない。孫悟空がお釈迦様の手から飛び出ることが出来なかったという話は、このダルマ・法の精神を説いたものである。世界の多くの神々にはみな神の意に添わぬもの、悪魔、罰せらるべきものが出現せずには済まないようであるが、如来の法身には敵対する者を認めることが出来ないのである。この仏教の思想によって日本には宗教戦争の禍いが無いということは、私達はほんとうに感謝すべきことである。

この様に法身ダルマは無限である。唯識という真如来現の如来もそうである。華嚴經のビルシャナ仏も密教の大日如来も、無量寿、無量光の阿弥陀如来も勿論そうである。

阿弥陀如来

阿弥陀如来の法身はこのように宇宙一杯のお身体であるが、一方阿弥陀仏には報身とい

って人間に生れ、苦を感じ、修行した報いによってお覺りを得られた、という人格身としての仏、私どもの覺りの先輩でもある訳で、そのお覺りの内容がまた宇宙一杯の法身に帰依しそれに一致してとけ込んでしまっただけの、人間の姿のままに、宇宙一杯の大きな命でもあるのである。したがって私どももこの法身如来の阿弥陀仏の外に出ることは出来ないのであるが、ただ私どもの意識はそれを否定することができるのである。

帰依

帰依とは、さからわないで順がうことである。南無は曲げるという意味で頭を下げることであるが、釈尊が法に帰依せられたのは、この私の力と法の力を比べた時、この私の無力を認められたからであらう。不幸を言うような私の意識の力では呼吸さえもうまく出来ない。眠ってしまったらどうなるのか。眼が見えるのも、音が聞えるのも、食べた物が消

化するのも、心臓も腎臓も何一つとしてこの私の手におえるものはないのである。文字通り生んで頂き、生かして頂いているわけで、この私は全く御恩のかたまりである。この自然や、ご先祖や社会の御恩は皆私以上のものである。それにさからって頑張ってみた所で何が出来ようか。如来の勅命を奉じてこそ偉大な働きをさせて頂けるのである。全ての善の根源は、この帰依にあるというのが全仏教の通則である。お念仏はこの仏教の大原則に最大限に一致した行である。生も死も如来にお任せする所に正しい生き方と、心の安らぎがあるのである。

煩悩

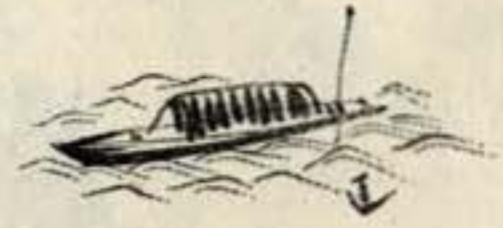
煩悩といえ、よく「肉体の悪魔」などといつて人間の欲望はすべて煩悩である、という人があるけど、人間の欲求は多くは如来の生命力であつて煩悩であるとは限らない。ただ自分を法身如来から切り離して、独立自

尊のものと思つて自我を主張する、我見と我執が煩悩なのである。

釈尊も苦行をなさったけれど、お覺りは苦行主義の否定において成就したのである。一方快樂主義も否定されたので、釈尊の主義はといへば帰依主義とでもいふべきであらう。

食欲が無くてお薬も飲めない様な重病人や、不眠症や、性的無能力で子孫が出来ないことが理想である等と考えるのは法身如来に対する反逆であつて、法帰依の態度ではない。我々仏教徒はこの苦行主義を奉じてはならない。自分も他人もともに命の榮えることを願つて利己主義と闘争心をいましめるべきであらう。

法然上人が従来の戒を超越してただ念仏のみをおすすめ下さったことは、そのまま法帰依に一致しほんとうの自由と如来の生命力發展への道をお教え下さったもので、これこそ万国の極宗ともいふべき教えである。



念佛ひじり三国志 (其)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

この梨ボトケ、ひよっとすると女身ではないだろうか。

住蓮はつれだって歩く美少年へ間断なく視線を投げた。

肌色の輝きは透明であった。烏帽子の裾から覗く黒髪はつややかに濡れた感じで、横顔の鼻陵は優雅な線をえがき、眼もとにはあでやかな泪るみさえある。唇も弾力をふくんで、なまめかしい。

住蓮は眠も心もうばわれて、母との会話も上の空だった。その母は、くりかえし今宵の別時念佛会へ参加したいと懇願するのである。

「今生の思い出に一度、安楽さまのご声明を……」
とまで言いつのる。

「お母さまは安楽さまとやらにかりて、住蓮さま、あなたの礼讃を聞きたいのでございます」

美少年は爽やかな声で言い添える。住蓮は狼狽した。「わしの礼讃をだど？　しかし……今宵、どこぞでお別時なぞあったかな」

はぐらかそうとしたわけではない。たしかに昨夜は獅

〈京洛・五条橋〉



前号のあらすじ

法然浄土教を信奉する弟子たちにとっても、念仏を實踐する信仰の様式はさまざまであった。「南無阿彌陀仏」を称名實踐するその一事の方法も、実は多様な苦悩と努力が必要であった。こうした専修教団の試行錯誤は、決して法然上人の偉大性をとがめるものではない。法然上人が決然として、簡潔に撰択された易行念仏の法門も、それを受け継いで行く人々にとっては、やはり幾つかの大きな試練があったのである。

かの安楽・住蓮の事件で有名な住蓮にしても、その例外ではない。ことさらに感受性の強い住蓮は、ある時、山深い草庵に狩猟三昧の日々を送る山ひじりと遭い、彼が彫った粗野素朴なる木仏たちに感激した。信仰ということへの最初の一歩を歩みだすひたむきな努力が、ここにもあったのである。

子ヶ谷で六時礼讃は興行された。安楽房が主宰したはずであった。住蓮は忌避して、時雨沢へかくれた。今宵の予定は聞いていないのである。

「今宵は、夕刻に吉水で法然さまのご説法があり、引き続き獅子ヶ谷の精舎でお別時がいとなまれますとか」少年の口もとは、なめらかに回転する。

「おぬし、それをどこで聞いたのか」

初めて住蓮は警戒心をおこした。近ごろ六時礼讃のお

別時にはとかくの評判が立ち、安楽房もごく内輪の信者にしか知らせていないはずであった。

「更科さまから手前どもへご通知がございました」

「更科さま……ああ、あの鈴虫どのかな」

「はい。私は近衛家で雑仕をつとめております。当家より一条家へあがりましたのが更科さまで」

その更科も近衛家の雑仕の娘だったが、とくに請われて一条家へ移籍したのである。そこに松虫という美少女がおり、一条家では更科を鈴虫と名乗らせて、鈴虫松虫なるコンビの美少女で抱えこんだ。

抱えこんだ、とは言っても当主の一条信能は自らの好色を満たすのが目的ではない。信能は計算高い男で、後鳥羽院の近臣に出世したこのチャンスをもさらに拡大しようと企図した。鈴虫松虫の美少女二人を高貴筋へ売りこんで、おのれの政治的野心の具に供すべく謀ったのである。

この計算はまんまと的中、今上の土御門は鈴虫にひと目惚れ、せっせと艶書を届けてくる現状だった。ただし住蓮はそこまでの事情に精通していない。法然の説法や安楽房主宰の別時念仏会へかよってくる二人の美女の存

在を知るのみである。

「そうか。おぬしは近衛家の者であったか」

住蓮は警戒心をほぐした。

近衛大納言の雑仕なら、更科の鈴虫とは連繫があるだろう。また最近、一条家の女房たちが仁和寺御所へ出入りして、安楽房から六時礼讃の手ほどきを受けているということだった。獅子ヶ谷での日程を知っていてもおかしくはない。

それと、住蓮の母朝子は若いころ近衛家に仕え、現在でも扶持をもらい、老後のささやかな生活をささえていた。近衛家へ出かけた折、この少年雑仕と知り合い、わが子住蓮と別時念仏会で落ち合う手だてをこしらえてもらったにちがいない。

この解逅への筋道はすっきりとおっていた。すっきりし過ぎているほどである。

住蓮母子と美少年の雑仕とは清水坂を下り、感神院の社前へ出た。ここは昔八坂氏の氏社だったが、八坂氏の衰亡と共に比叡山延暦寺の別院となった。僧徒が日吉の神輿をかついで朝廷へ強訴する折の基地でもある。明治以降は神仏分離によって八坂神社と称するようになる。

山門から轢音をとどろかせて巨大な牛が走り出てくるのにゆき遇った。

「危いっ」

住蓮は老母をかばったつもりだが、黒衣の片袖は少年の身体を抱きすくめていた。

「無体な走りぶりを」

少年は非難の声を洩らした。

暴走する越前牛は、華美なよそおいの牛車を引きずっていたのである。境内の坂を一気に駆けおりてきたとみえ、牛童はすでに振り切られ、無人の暴走であった。

牛車は住蓮たちを砂塵で巻くと、数軒先の大ケヤキに車輪をぶちあてて急停車した。

車内にいる貴人が自ら手綱を駛したものと思われる。

その貴人は、車外へ降り立つと住蓮の方へ歩いてきた。親しげに笑っている。

貴人——僧形であった。眉毛の太い偉丈夫の相貌だった。

「どこへゆかれる？」

問いかけてきた。

住蓮は答えなかった。全く未知の顔だったからである。

「危いことをなさいますな」

少年はかん高く叫んで、貴人をとがめた。

「いや……近ごろ越前から求めたこの駿牛、なかなか手におえぬ。獅子丸と名を与えたが、その名のとおり暴ばれよる」

「こちらは法然さまのご高足、住蓮房さままでございます」
どうやら貴人が親しげに笑んだ相手は、この美少年だったようである。

「法然房のご高足……いやあ、これは無礼なことを。お許しあれ」

僧形の頭を深々とたれて、馬鹿丁寧に詫び入れてきた。

これだけの牛車を使う貴紳の僧が、なぜ一介の念仏ひじりにこんな態度を示すのだろうか。

ようやく駆けつけた二人の牛童が、なおも暴ばれる越前牛をおさえこみ、大ケヤキにからんだ牛車を大路の方へ引き出した。貴紳の僧は再度深々と頭をたれると、牛車の方へ去った。

「どなただったかな」

住蓮は少年に訊いた。

「一条さまの御舎弟で、尊長さまでございます」

「あ、あの方が今をときめく尊長僧都であつたか」

後鳥羽院の信望を一身に集め、鎌倉北条家調伏の祈願を最勝四天王院で修法する院政の黒幕だった。

秘密警察の長官の役もになってきたが、住蓮もそこまでは知らない。

「そなたとは、だいぶ親しげな様子だったが」

と、住蓮は美少年を見すえた。

「一条少将のご舎弟です。あちらで何べんもお目にかかつております」

「そうか……そなたのように美形じゃと、誰とでもすぐに親しくなれるのう」

「そんなかわり合いはございませぬ」

少年はちよっと身をくねらせると、こびるような眼差して住蓮をふり仰いだ。

二

この建永年時における一条家は、廟堂にあって必ずしも陽のあたる場所をしめている、とは言えない。なるほ

ど信能少将や弟の尊長が後鳥羽院の寵を受けて側近に出世したとは言え、貴族仲間では未だ問題にならぬほど低い席次であつた。

亡父能保は、源家頼朝將軍の妹を妻に迎え、娘を関白兼実の宗嗣良経の正室へ送りこむなど、ひところは華々しく羽搏いたものだが、能保の死とともに脱落した。息子たちの身の軽さも影響したにちがいない。九条家へ嫁した娘は良経の正室から外ずされ、嗣子信能の官位も少将止まりである。

懸命な巻き返しが、後鳥羽院への接近であり、鈴虫松虫などの美姫をたくわえ、今上の土御門との強縁を形造ろうとしている。

この権力へのひたむきな傾斜は、やがて着々と結実し、尊長僧都は二位ノ法印にまで出世して、後鳥羽院を弄絡するところへまで上昇した。ただし、危険な賭けを打たねばならなかった。鎌倉北条氏と真向うから対立した承久ノ乱へのエスカレートである。

この賭けに失敗した信能兄弟たちは、乱後鎌倉から追討される運命をたどる。一条家そのものも本家の九条家へ吸収されてしまう。

九条兼実の孫にあたる道家は、承久ノ乱後その息子三人に九条、二条、一条家を継がせる。九条は教実、二条は良実、一条は実経である。

それぞれの嫡流は昭和の時代まで続いた。同じ藤原一族の別流たる近衛家も鷹司家とわかれ、これら九条、二条、一条、近衛、鷹司が長い期間にわたって「五摂家」と呼ばれるようになるのである。

ところでこの時期、尊長僧都の傍若無人ぶりは貴族たちの目に余るものがあつた。鎌倉期に制作された絵詞「駿牛絵」にも尊長の牛がえがかれている。越前産の猛牛を牛車に取り付け、暴走させるのである。建暦二年の賀茂大祭には、大群衆のまっただなかを駆けぬけていった。牛童四人はハネ飛ばされ、祭見物の民衆を多数傷つけた。そればかりか牛車は転覆、尊長自身も額を割って血にまみれ、近くの民家へかつぎこまれたと記録されている。

感神院山門前での尊長とのめぐり会い、住蓮はやがてさらに苛酷な再会を強いられる。それは馬淵ノ庄で斬罪に処せられたときだ。執行官は尊長僧都であつた。ちなみに馬淵ノ庄は、尊長自身の庄園でもあつた。

話は前後するが、九条兼実の嗣子京極良経が謎の死を遂げたことは（建永元年三月）前にもふれた。犯人を三浦秀能——安楽房を斬った官人秀能、とも推量した。

この謀殺の背後で、卿二位兼子というぶ気味な女性の影が遙曳するのを払拭することが出来ない。

兼子はしばしば書いてきたように後鳥羽院の乳母である。

乳母を退いたあと兼子は、九条兼実の家司で権大納言宗頼の妻となる。凡々と四十九歳まで主婦の立場に甘んじてきた。

すでに老女となりかけた兼子が、ある日突然、人変りする。政界へ大飛躍を試みるのである。

そのある日とは、後鳥羽院の熊野行幸であつた。建仁三年（一二〇三）正月である。この建永元年よりわずか三年前にあたる。後鳥羽院に随行して熊野参詣へ出かける。ところが深夜の旅先で夫の宗頼は妻がかざっていた松火で足を焼き、頓死してしまう。その頓死が謀殺であつたかどうか。

帰洛した兼子は、ただちに貧乏公卿の頼実と再婚する。お互いに四十九歳だった。しかも頼実は三十年来の

妻を捨てている。

この再婚から一年そこそこ、兼子は二位にまで昇り、夫の頼実が太政大臣になってしまふのである。

頼実には十九歳になる娘が先妻との間にいた。麗子と呼ばれた。この麗子を強引に土御門天皇の中宮とした。天皇は十歳だった。

しかし入内までには難関があった。ライバルをつぶさねばならない。そのライバルとは九条兼実の孫、京極良経の娘立子だった。十四歳である。

兼子はその弁舌で良経を説きふせ、麗子を入内させてしまふ。説得の筋道は、立子は未だ十四歳で若い。天皇よりも皇太子妃（順徳）となるチャンスがある。ここは麗子に譲れ、と口説き、泣訴したのである。後鳥羽院のあと押しがあったことは、言うまでもない。

麗子が入内した直後に、九条良経は謎の死を遂げる。

孤児となった立子に皇太子妃となるチャンスは容易にめぐって来なかった。ようやく五年が過ぎて、卿二位兼子の権勢が後退しはじめ、兄道家の政治的立場が安定したところ実現したのだった。

良経怪死の裏で遙曳する女傑の影――

今この建永元年も暮れようとする暖冬、兼子は後鳥羽院に随行して熊野参詣の旅中にあった。奇しくも先夫宗頼が横死したのと同じ筋書がととのった。しかも留守の京洛は、兵仗の権が夫頼実に与えられている。

ぶ気味な魔手がうごめきつつある。魔手を向ける対象はどこなのであろうか。

話は先走る。

たしかにこのお膳立てのもとで、「建永の法難」が惹起する。藤原定家がその「明月記」で「近日、只一向専修ノ沙汰、搦ラメ取ラレ、拷問サルト云々。筆端ノ及ブ所ニアラズ」と恐怖した大断圧だ。

でもねらいは、区々たる念仏ひじりではあるまい。彼らの風紀壊乱なぞ口実に過ぎない。明月記はまた別の日時に「専修念仏ノ輩停止ノ事、重ネテ宣下スベシト云々去ルコロイササカ事故アリト云々（ソノ事スデニ軽カラズ。又子細ヲ知ラズ。筆ヲ染ムルニ及バズ）」とも書く。

ねらいは法然そのものであり、さらには良経の怪死とそれに刺戟された鎌倉武士たちへの牽制球だったであろう。九条兼実の完全失脚こそ妖雲のおもむく目的地だったのではなからうか。

現に九条兼実は、法然流罪と前後して年が明けた四月五日、生涯を閉じる。その日の「明月記」は、

——門ヲ閉ジテ籠居ス。昏ニ臨ミ巷説ニ云ウ。入道殿下、御入滅云々。日来、御増ノ由知ラズ。甚ダ以テ悲慟ス。須ラク馳セ参ズベシ

と記しながらも結局、九条邸を弔問した様子はない。兼実とかかわることがわが身に危険が及ぶ、という予感を貴族独特の嗅覚で感知していたのであろうか。

そんな嗅覚を増進させる事件が建永元年の夏に発生している。鈴虫松虫事件の半年ほど前にあたる。三条長兼の「三長記」が紹介する。

長兼は現在で言う法務長官のような地位にあった公卿で、政治に左右されない公正な立場をくずさなかった。例の興福寺奏状の折も法然門下の専修念仏者の過激派に警告は発したが、この処置は奏状に応じたものではないと興福寺へ釘を刺し「差し戻し」にしている。その奇異な事件は嵯峨で発生した。

三

嵯峨に美女の誉れも高い娘がいた。実印僧都と尼衆との間にできた子だという。

この娘のもとへ建永元年の六月ごろから一人の男がしのんできて、兩人は結婚した。男は自ら後鳥羽上皇だと名乗り、母の老尼も娘とともに男を信じこんだ。

嵯峨清涼寺の別当はその後鳥羽上皇に疑念をいだき、鑑定を聖覚に頼んだ。聖覚は男と面会したが自信が持てず、さらに民部卿の範光へまわした。

ついに後鳥羽院自身の叡聞に達した。七月十一日このニセ上皇を逮捕するために検非違使が向った。

カノ家ヲ囲ム。クダンノ時、カノ狂夫（ニセ上皇）ソノ家ニ在リ。而シテ擲ラメ洩ラシヌ。カノ女並ビニ尼ヲ召シ捕リテ使者帰参。仔細ヲ召シ問ワルルニ申ス条從横、或イハ九条宰相中将ト称シ、変々舌ヲヒルガエス。クダンノ狂夫ヲ確カニ召シ進ズベキノ由任雅（清涼寺別当）ニ仰セラル。マタ、

クダンノ女ヲ任雅ニ預ケ給ウ云々

「三長記」は書く。

要するに、後鳥羽院だと自称する男を逮捕に向ったが、搦め洩らした、というのである。しかも女を問い詰めると後鳥羽院ではなくて九条宰相中将良平だとも証言する。

良平は兼実の息子で、この三月怪死した良経の実弟である。

長兼は職責上、聞き流すことも出来ず、大宮中納言公経に調査させた。公経は、この法然によって出家し、法然没後もその七日忌に諷誦文を献じた大宮内府実宗の長子である。調査状況が三条長兼の筆によると、するぶる微妙である。

狂夫、上皇ト称スルノ由、偽リヲ云ウ詞一ツニアラザレバ、クワシクハコレヲ記サズ。コノ事説クベカラズ、説クベカズ。……予コノ事ヲ案ズルニ、専ラ沙汰ニ及ブベカラズ。大略。天狗ノ所為カ

天狗のせいになっている。九条兼実もその日記「玉葉」でしばしば後白河法皇の権謀術策を天狗の所業とするが、ここの天狗は後鳥羽院自身のことであるか。

ではなぜ後鳥羽院はこんな「天狗ノ所為」を企らむのであろうか。長兼は記述を続ける。

八月十日（建永元年）嵯峨ノ狂女ノ事、宰相中将（良平）ノ御所為ノ由称シ申スニヨリ、当時ヲ知ル者、後ノ証拠ニ尋ネラル。知允ヲ証ニ指シ申ス。ヨツテ知允良シ間ワルルノトコロ、カノ女ハ、故殿（良経）ノ姫君ノ御方ニ祗候ノ間、宰相中将ニ艶気アリ。コノ条ニオイテハ見及ブノ由、コレヲ申ス

ねらいは九条良平が、姪にあたる良経の娘に「艶気アリ」の事実を暴露するためであったか。その姫とは立子のことであろう。土御門天皇の中宮の座を、卿二位兼子夫婦の娘麗子とせり合っていたライバルである。

この奇異な事件に関する「三長記」の文章は最後で見落しがたい結着をつけている。

九月二日、大将（道家——故良経の長子）ノ御方ニ参ル。宰相中将殿（良平）同坐。予、嵯峨ノ狂女ノ事ヲ尋ネ申スニ仰セラレテ云ウ。スコブル安堵シタリ。去ルコロ、クダンノ女ヲ重ネテ料問セシニ、ソノ刑ヲ苦ニシ、ソノ面ヲ洗ワント称シテ云ウ。宰相中将殿ノ由ヲ申セシモ無実ナリ。貴種ニヨツテ定メテ御沙汰ヲナダメルルカノ由、コレヲ思イ、ヨツテ称スル所ナリ。実ハ伊予守実基ノ所為ナリト云々。ヨツテ実基ハ北野ノ聖廊ニ参籠スト云々

犯人が出た、と言うのである。

嵯峨の女は、九条良平の名前を出せば、その権力で罪が許されると思ひ口走ったが、後鳥羽院を名乗った狂夫は、伊予守実基だった、と告白した、と三条長兼は事件落着を報じている。

前に「天狗ノ所為」と断じながら、今ここでは真犯人を指名する。ここらあたりに九条家の危機を回避した政治工作の臭気が濃厚にたちこめてくる。

伊予守実基とは、どういう男であらうか。徳大寺公継の子である。「四十八巻伝」に「野宮左大臣奇瑞往生ノ

事」で登場する公継である。父は実定、母は上西門院に仕えた女房備後だ。

この公継は早くから法然に帰依していた。母備後が仕えた上西門院——後白河法皇の姉統子内親王が法然の説戒を受けており、その法縁から念仏門へ投じた。とも思われる。

元久二年（一二〇五）の興福寺奏状は、法然門を弾劾し、弟子のなかでわざわざこの公継を名指しで重罪に処せ、と訴えているほどである。

ただし伊予守実基が徳大寺公継の子である、という説には疑問がある。公継の兄か弟にあたる左大弁公定の子だったのではあるまいか。

藤原定家の「明月記」は九月十七日の項で流罪が決定した公定、実基父子の悲嘆を記述している。佐渡島へ流されることになり、父子は自邸の庭上に臥し「浄衣ヲ着シテ相見ニ。先ズ落涙、時ニ曉鐘ヲ聞ク。言談スル事、筆端ニ尽シ難シ。今年斗藪シ只聖主ノ御運ヲ祈リ奉ル。年来奉公ノ間、イササカノ不忠ヲ存ゼズ。今此ノ殃ヲ遇ウ。二親、心肝ヲクダカル。宿運ノ至リ、因果ニ迷ウ者ナリ。年来コノ人ニ相馴ル。心中実ニ夢ノ如シ」と同情

＜白拍子＞



の言葉を惜しまない。定家自身も冤罪だと信じていたの
であらう。

後鳥羽院は天乳母の卿二位兼子や秘密警察たる尊長僧
都に煽動されて九条家を加撃することを思い立った。自
ら嵯峨の女のもとへ通い、兼子の娘麗子と立皇后で争っ
ているライバル良経の娘立子を引きずりおろすことが直
接の目的だった。叔父良平との「艶気」を証言させ、所
期の目的は達成した。

しかし、九条家そのものといつまでも争っているわけ
にはいかない。強い牽制球を投じて壘上へ釘付けにし
た。真犯人を捏造しておかない、と廟堂が混乱する。

そこで貧乏クジを引いたのが実基父子だった、という
ことになりはすまいか。徳大寺公継はこの春大納言にな
ったばかりである。左大弁の公定や実基など二流公卿な
らば影響力も少い。犯人にデッチあげて、流罪に処した
のではあるまいか。

九条家としてもひととおりのピンチは回避できた。
「スコブル安堵シタ」のである。

ところで、こんな他愛ない(?)事件になぜこだわった
のか。同じ建永元年の七月から九月へかけて惹起したこ

の奇異な事件が、三カ月後の専修念仏への断圧、その真相を物語る有力な背景と思われたからである。

背景と言え、法然流罪のきっかけとなった安樂、住蓮の密通事件と甚だ酷似してもいる。つまり伊予守実基自身も、この少し前、後鳥羽院の愛人である白拍子と密通したとして、叱責されたことがあったからである。

なまぐさい、それでいてぶ気味な殺気をはらんだ陰風が、東山吉水の法然禅室が漂いはじめたこの建永元年の十二月。

住蓮は老母と美少年をともなつて禅室への坂を登っていった。にぶい冬の夕陽が、山路の草々へ大儀そうに光りの足を投げかけていた。

「吉水へは？」

「初めてでございます」

と美少年は微笑んだ。

「法然さまとは？」

「そちらも初めてで……今から胸がわくわくしております」

「なぜ？」

「だって当代第一の名僧。生き仏とうたわれる法然さま

にお会いできるのです」

「生き仏……うむ。お上人はまぎれもなく生き仏さまだ」

お世辞でも師を褒められるのは悪い気持ではない。すっかりうわずって住蓮は、少年の顔を正面から見つめ直した。

濡々しい眼もと、形のいい唇。薄墨でかいた眉毛も白い肌にびったりだった。

「何か？」

少年は表情にしな（媚態）を作つて、住蓮を見つめかえしてくる。自信にみちた眼であった。つまり、住蓮の心を手の内へくるみこめる自信――

「おぬし、幾つになる」

「え……」

「当年、何歳かと聞いておる」

「はい……十五でございます」

十五歳か。若い。まだ子供だ。

とすると、あのシミは何だろう、と住蓮は今初めて気づいた少年の右こめかみを見つめた。火ぶくれたようなシミが流れていたのである。

（つづく）

二 編集後記 二

○快い秋の風に心を任せながら、もの想いに耽り、しばし時を忘れてくつろぐ。秋思秋想——私だけの気ままな時間。そんなゆとりが欲しい。昼には、青く澄みきった、天高き大空を見つめて、明日に向って身と心とを清くしたい。また夜には、久しく忘れてしまった秋の星座の一つ一つを数えて、過ぎ来し方の思い出を改めて確認しておきたい。

○こんなことを願いつつも、実は今、私は来る十一月八日(土)、東京田町・笹川記念会館で開催する予定の「法然上人鑽仰会創立四十五周年」の記念式典に向けての準備仕事に大わらわです。弊会活動も、久しく『浄土』誌刊行の一事に尽きる、それこそ微力な努力に終始した来たわけですが、今回のこの催しを契機として一九八〇年代の新しい法然上人鑽仰運動を模索したいわけです。本文中のご案内にも表示しておきま

したように、結構バラエティに富んだ企画ができた、いささか自負をいたしているのですが、この式典の成功不成功は、ひとえに会員諸兄のご協力ご支援にかかっているわけです。どうか皆様の暖かいお心をもちまして、鑽仰会の新しい躍進のために、また善導大師一三〇〇年遠忌及び法然上人ご誕生八五〇年お待受慶讃のために、くれぐれも宜しくお願い申し上げます。そういう意味で、当日は会員の皆様がお知り合いの方々をお誘い合って、一人でも多くの皆様にお集まり願いたいわけです。

○さて、『浄土』の表紙絵は、土屋正男先生の力作が毎月趣好をこらした図案で飾られ、私たちの目を大変楽しませていただいております。この表紙版画絵の豪華額縁に納まった掛け物は、まったく見事なものです。比較のお安いはずですので、どうか皆様からの振ってのご注文をお待ちしております。現在、正月号から本誌十月号表紙分まで、十点それぞれ大変すばらしいです。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十六巻 十月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十五年九月二十五日 印刷
昭和五十五年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十二―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

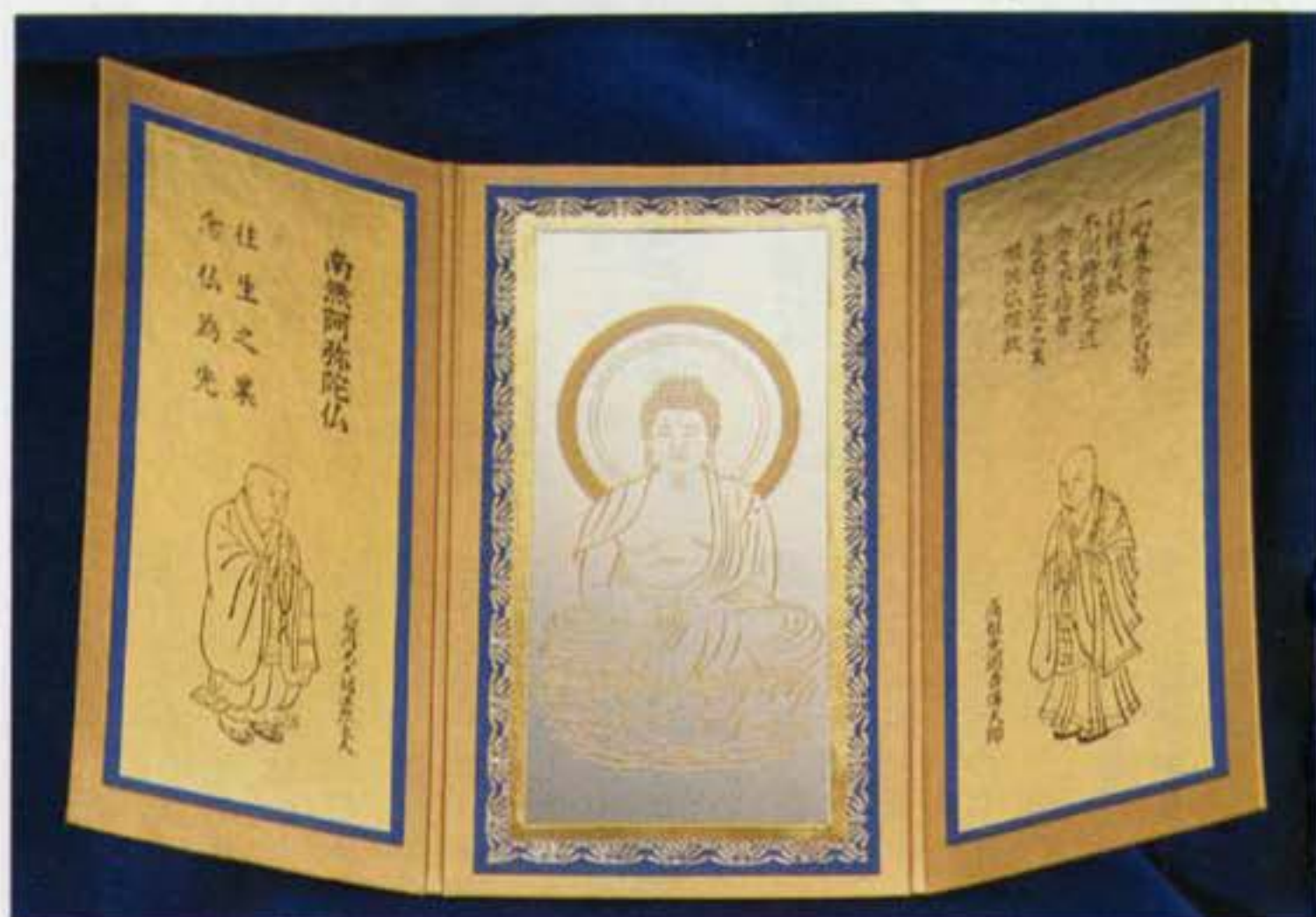
千二〇三 振替東京八一八二一八七番

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十五年九月二十五日印刷 昭和五十五年十月一日発行

第四十六卷

第十号

ねん じ ぶつ
念 持 仏
=好評発売中=



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm×14cm 3枚折・実用新案登録済＝番号53-044860号

(発売元) 〒153
東京都目黒区目黒 4-16-12
株式会社 泰 童
TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
東京都千代田区飯田橋 1-11-6
法然上人鑽仰会
振替(東京)8-82187番